

掌中乙由叢句集

全



掌中麦林舎乙由發句集

春之部

二見うゝ蔭繪やほゝ門乃松
若水や井戸うゝまの、囀ひ妙
孤燈うゝ春ほゝくゝ又面白き喜ふ姿ふ
経樂もゆれえ者しゝま川日新
書老姑芥也元旦のめつとろふ程ひて
まのぬ紙踏りそゝくや根白艸

至長家居の隅をふけくひ燈もあきも

わくまをばみよを待ゆり

わく燈より草乃をく先やかたり縄

折ふあを物さうりもちりしを川磨

新ぬや先成りすれきづ井筒

くくハ芳指の花は先達せんといふ事ある

十方庵の古きくの音は小告ありんか

何ものをもく野くを初こより

笠縫も綿着く出給やあ葉指

組板乃被成あきあきあ新う船

約下詰り型個歳人あ葉あつ

人日新一季にけ世をきりし人あき

留於世や葉あきあきあきあき

足中りふあああああああああ

鬼を結名を病あきあきあああ

き寺の梅ああああああああ

足るのきや実を待寺乃正免花
天神寺納

祇の威張笠下や梅の白ひる
鶯の為でお海しと歌をのき
うひまは啼く日暮休も静まりぬ
急さらぬ身成をぬる柳うき
多うれく柳と松ふ障るうき
唐縁ふも仮名ふと歌く柳老

船態奥の沈より士峯幽ふ又ゆ
祇免出に富士や弥地のをとす
象を琵琶をくもやおほる月
清くくや何をわすれて中へ
東花坊う新免乃屏風小蓮六わりて
白程を通しと落出りて
乙多う来くく机乃墨中六
うひまよ返奏の通を蛙の如

天神身納

牙うへ涼日も暮ふしと自在竹
 半の角落ぬまの色祢まん像
 涅槃まや浴室ハミを裸むし
 老僧ふ死さしむ何れねはん像
 風人を送つ
 晴ふ露くぬりこめくか既陀佛
 夢臥て思ふかしの如や夕雲在

二月末の八日の菜種天神事とらや
 神垣や菜とけり又膳の舞
 女とらるる沙も何れもくらの様
 志をりて笑ひ出しり山ささく
 蕙翁の像
 芳野のふりて立くもやまー花の香
 蓮二と送る
 足初くくや花の香氣を何れもささく

多岐路に任むるは秋のふゆに
暮霞の影に佇まふは秋のふゆに
菖蒲の葉にまみりて事なきは
かたはれは女小対し

園の名は紫のうらさきしは乃雪
曲ありて心ありいそありは乃釣籠
三日の月もあかく小交は乃挑乃酒
雪の中より人乃あつたりは乃花

けさの雪を餅より搗れは乃花咲ぬ
出た乃蓮や釣籠は乃花咲ぬ
おろりては花もあつたりは乃花

秋を送る

持歩は葉や風呂あは乃旅すは
海棠の葉は静かに咲小あつり
山よりあはれは流れては乃花
春ぬ人あつたりは乃花

龜山八幡宮奉納

松戸後そは鑑ひ免もおもふは
故へ赴く人と送歌

道くや大津終ふ是為の景

仙人乃基も指さるわらひうた

素心古海より清く平く傳ふ由傳

まけ笠や税とあると此翁は是を

終麻と綴とく

け春や櫻もくく終麻か

孫生嶋日田村川とるく

光陰乃矢もけ春や田む川

常能啼庭くく夢り月日星

夏之節

け雨かきく出ま終給う那

とるく

骨て何忘園扇とるく一交衣

ほろろ交は掛摩乃身の明と時

山家山々

時鳥卯年、紛は秋、暮もあし
く交す一秋、く、能月乃欠
夕暮を伸ふられ、何とほろろ交は
漕佛や乳を多し、孫も比丘尼寺
色く、能新乃、帯や、花、漸堂
鏡お、海に人のあろろや、牡丹畑

古山亭に中より、多、秋、卯年の暮

いまこそ、多、られと

わきろろ、ふ、牡丹の、秋、乃、能、森、ろ、ふ
漬、阿、者、一、秋、の、間、能、色、也、か、能、つ、も、と
伸、ふ、能、多、隠、れ、能、海、也、杜、若、新
芍、薬、乃、一、味、能、多、り、能、者、の、能
う、交、多、也、と、能、多、何、ろ、ろ、能、能、不、能、咲
や、と、能、能、兎、も、能、多、ふ、や、能、芥、子、の、能、花

菴のぬく霧のあふるつとりの
日笋をのびると名一富士二響とつと
はるくをたれふはまけりてわくくを
あれ又竹をまじむの君子よあそびて
今更りふ八束もあつたをまじむ
子菜の始とつと七十の壽子
一与を送歌

作の子結き子乃その子き子まで

同く木倉堂にて

程ありれ衆も密掛ををれ若時
紫湯急よあつたを交約日夕日か
山之けや踏子とのほほ田うへ
間くは顔見合をうへ田極うを
和昆福地結神めく

八乙女多田うへ佩ふなり夏神樂
はつあふくよまや大河と一誇れ

追悼

薬草も屯くま向新夏野分
夕顔結氣下多形ハあうりも
南天の屯や吉年能実乃隣
中戸ゆか流も人あり壬午の猿
こころ乗や人音何まは夫和格
途坂の急こころ象と見侍りて
今也むく案乃清あふ象の氣

石山結るも々々けは花よあまは

画賛

藤うられの籠空雷り雷と那
うんあまわれも淋しん能花よの
新落る幾り枝や青何し
東武へ赴く人と送れ
空の夢は免く一石二を山如子
沈足結糸く執くや何をり費

菟乃心を酒みもわりと糝りま
蝶の羽も渡り通ふやぬをさけ

春波うる国へ赴くと送る

姫申りも鬼をわけりや茶飯さ

加賀の子や女は海にめくり逢ふ

九重天一重と歩むは申りうま

多野女人をささく

百命もを姫せりよ名ふとほるる歌

睡子もおうく手あはてぬりぬ

蒨秋いろは事なりをちあふ

ころあそく多し別れ時

めくりまよふ目遊らうすま風車

梅子とらんくや乳の強布ゆり

揃うと暑い架りありむむ海山

ぬえり

花よりも一ぬきこの後蓮乃喜

蓮池や 寺をこゝ土乃何ぞ
ての瓜や 都へ出れん 今も昔も
冬の月 能く時ふ 是れも一物
見ふも 秋の物 更ありけり
月能く 是れ 秋の物 更ありけり
細涼と 僅に 是れ 秋の物 更ありけり
かへ 是れ 秋の物 更ありけり
魚丸 芋 五 粟の 秋の物 更ありけり

粟と芋 能く 是れ 秋の物 更ありけり
名ふ 是れ 秋の物 更ありけり
玉と 是れ 秋の物 更ありけり
新の 是れ 秋の物 更ありけり
涼 是れ 秋の物 更ありけり
す 是れ 秋の物 更ありけり
夕 是れ 秋の物 更ありけり
暮 是れ 秋の物 更ありけり

幻々庵あり花結河——海のほとけ
いへくもつらぬきのおんたけハ巨魁の
女結さうらうまうらひ葉漢のこころも
お——か——んや予は夏夏ふれりて教習
の采と花然と送休脱小端結又夏
直寐の夢と舞き狂まの夢ふ美奈
とまの事さうら

涼——やされ思ふは山もた——

き結夢まこの山と交りまわり
ふ壇下きこりよのあつさうら
かぬや智恵さぬくのうらりかあ

秋之部

凌宵乃花吹消——今朝の秋
秋寺川や笑もあ結 彌子芥
立琴に風も雪井乃あ——
ふふふふか——裸や井婦人

乙
乙
とそ琴や秋海棠乃瓜はつを
机をたてし丸や星のあれを
星合也糖と品しるの如く
秋もまゝと孫居りて秋阿つさ
空り子純きもうあし海あり
小車乃はくやあしもままつり
妻は身ゆりもあし
おもひやとせふわけて

乙
乙
まろ宵小琴秋梢やあすあしぬ
名月や糖を落とも舟乃く
やくて流歌山を流りはやくの舟
名月や流りて秋歌も糖も
名月やい川の山の山歌
森と家歌ふ眼むやうと
名月や齒舟もゆく
いとよひやりあし胃の園

十六夜や露出能逢ひ人よりと
山麓や露まうそはあそく放生會
松茸能見ゆわつのは豆腐の家
亡父の忌日よ

とよひの啼ふ泣あても秋を
麻の節あつり角をあつり
秋風やあつりぬく麻乃あえ
麻の節あつりぬ山をまうそ書し

野上の里あそく

蕨とえそ居れも薄うまの節あ
近付り能さあてそ秋 踊り歌
八節や踊り方足をかこまう

八月二日武蔵中身油うり入と悼
惜まれそあつりそ入ま二日内
初丁や一節り履く文字う家
故を能くそ仕あつりそ一節り

乙由
以道へ迷ふもようも乃花

画賛

蘭の香を散りてあはむきりくま

山田屋何ううらみとあそ

兼能あふまよふや既陀の墨所

夕顔や秋を扇よのせらまは

ゆよのりも枕仕虫は醒わけりぬ

待宵や立花ふりては露の松

海老あふり地蔵をぬれてかきか

刈仕おふ田にうつろいと紫山子うま

画賛

横平ふかきききくや露乃は

おいらききききききききききき

ききききききききききききき

波まのくまも洗ひぬきぬきぬ

八重菊もなりぬ日乃あはひの如

秘り統とけいし

嘉とけい花と葉多し一寺の菊
世結多し葉多しあけし一葉の花

十三歌

盗人ふあけ照月や夏をこり
夏餅乃葉多し不折ふ十三歌
一とせ柿と庵多しう病不焼蛤の
何處しせしきしもは菊月の以て

きりこししを蔵林法沙をいそきひく

その其席の奥とありふ

蛤乃跡耳多し部とり 柚味増うた
泣く来て子も飯喰ふや稻粒中
林間り仁まも破して 死多し
未葉亭あり

松喜し 簾よむくえりみち 紺
川秋結及くあけは 死多しうた

老母の喪に終りて人の身は
明も教は木の葉も秋の葉

鬼乃画賛

何れ破何をよみ居秋のうれ
九条母終屍もよみ居秋のうれ

冬之節

赤心実の何く 縁は初しうれ
空染結ぬれ色覚せし川時返

葉焼くうら冬高き時返うら

乙高亭に招れ

金屏り乾くしうれ結今うり
蓮広忌や拂子よみ居秋のうれ
枯芦よ書や跡しう池乃鴨
鶏形冬立生乃十数り那
蓮池を招き好ましく十数り
風や草よ心終さぬ 雪結松

菫翁の塚あり

春雪あふ 跡残あふふや 春の仙宅
木兔孤目もろく 幾忘れ死落塚あり
春まよきさや 一臥冬 又むくふ風

素道の氣宅と賀入し

春小色尾籠乃 泣くや忍ひす襟
足高り 襦袢と 踏つて 拵り
河めく 麦林の 采眉と 踏ひらぬ

世知人々 家妻小見か 一と 終もあう

隠れ家や 餘取う 見え冬 牡丹
冬籠り 棧一 搦院 一 せり
枕りも ちりぬ 豆腐や 冬籠り

秋まか入産の時

世の中のかきり 悲け くる 水
吹川や 子鳥も 川流曲り 形
碧糸結隣も あく くる ちり水

星の夜に梨地と啼やむ子音
を川をやまに持てぬ敷らうし
風死に砂子果報や水乃雪
大湊うそく

雪らんよや帆紙をたれり
鶴乃りまはれてるあつこま
小燈に湊のゆにたひく
吹まこくを巨魁へりてゆりな

月影と乾く多しをほくし
冬の月白く豆腐と梅乃花
雪に尾乃くくもるもく
うとん屋を人牙喰をくもく
雪と茶を淋しく秋の地の
蔓不巻く

あは雪を降る歩りや律多
木のけりぬやうおまを生活氣分

獵ハや梅も眼乃むくきとき
 獵ハやハ影の薪も山狭出於
 煙火やあつたまふれを早ひしり
 ちさし此方よりやしのをを
 しのひよと大黒取巾とやうむ
 おうしあなはあはまのやちう
 世の音をまねもうましー九取巾
 紙子まろくんて居るや雉羽の衣碓り

